國學院大學学術情報リポジトリ

中世前期における暴力と古代体制：ジラール学という観点から

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-04-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ルーシュ, ミシェル, ラクビビエ, ポール ド
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000323

「中世前期における暴力と古代体制
―ジラール学という観点から」

（Violences et structures archaïques du Haut Moyen-Âge ：
perspectives girardiennes）

ミシェル・ルーシュ
ポール・ド・ラクビビエ訳
Michel Rouche 教授より（1934年生まれ）
フランス国立古文書学校にて
2014年10月28日

前注

1　本稿は、パリ・ソルボンヌ大学　名誉教授（当時）　ミシェル・ルーシュ　Michel Rouche（1934－2021）によるフランス国立古文書学校における講演（Violences et structures archaïques du Haut Moyen-Âge ：perspectives girardiennes）を日本語に訳したものである。本講演は下記によっている。

録画

https://www.youtube.com/watch?v=sWHTETkyxQI&list=PLayqwLSo_nPWbz4ew7_RQuLmHuamvwByr

～～

2　フランス国立古文書学校（École nationale des chartes）は1821年に創立された文系の一級の学校で、王政時代の、フランス史上の全国のすべての史料を保管し、分析して、研究するために人材を養成するための機関である。高度な史学手法と網羅的な文献主義・実証主義に基づいた研究を展開してきており、現代でも史学研究における最高学府とされている。

～～

3　ミシェル・ルーシュ（Michel Rouche）教授は、パリにて1934年生まれる。ソルボンヌ大学の名誉教授。古代末期、中世前期の専門家。アンリ・イレネ・マル―（Henri-Irenée Marrou）などの学統を汲み、フランス国立古文書学校やソルボンヌ大学を経てから、多くの学術成果を残した。« Clovis »（『クロヴィス』）

Fayard、1996、« Attila, La violence nomade »（『アッティラ』）、2009, « Les Racines de l'Europe : Les sociétés du Haut Moyen-Âge, 588 à 888 »（『ヨーロッパの起源』）、Fayard, 2003 « Histoire de l'enseignement et de l'éducation, Tome I »（『子育てと教育の歴史、第一巻』）, Perrin, 2003、« Les Origines du christianisme, 30-451 »（『キリスト教の起源』）Hachette、2007、« Le Choc des cultures, Romanité, Germanité, Chrétienté, durant le Haut Moyen Âge »（『中世前期における文化衝突、ローマ風、ゲルマン風、キリスト教風』）, Septentrion, 2003をはじめ、著書は多数ある。2021年12月没。

4　訳者からの注意
講演の和訳となるので、口頭文のままにした。脚注は訳者による補遺となる。表記はドイツ語系とフランス語系の慣行表記の問題もあり、便宜上原文のままにした箇所もあるが、なるべくカタカナで表記にして原文を括弧に入れた。括弧内のイタリック体の文章は訳者が補った箇所である。

5　ジラール学とはルネ・ジラール（René Girard、1923年出生、2015年没）が築いた人類学の基礎理論に基づいて研究することを指し、それからジラールの研究を活かし、その理論をさらに発展させる研究を指す。暴力と宗教との関係、それから生贄やヤギの身代わり現象の考察など、人類学で取り扱われるテーマが多い。

〜〜

「中世前期における暴力と古代体制－ジラール学という観点から」ミシェル・ルーシュより

お誘いいただき感謝しております。ご提案を頂いたとき、嬉しく思いました。なぜなら中世前期に関する専門家が少なく、歴史家がそういった課題について発表できる機会も少ない一方で、中世前期の全体図を把握することは学生たちにとっては重要だと思うからです。

私自身は1954年に、アンリ・イレネ・マルー（Henri-Irenée Marrou）の教授をはじめ、古代後期の専門家たちの授業のお陰で初めてその世界に入りましたが、当時の教授の方々は皆、古代後期の専門家であったこともあり、中世前期は多少軽視されていたと申しますか、あるいは軽蔑さえされていたと申しますか、そのような空気がありました。しかしながら、中

世前期を見ていくと、驚くべき事柄や目から鱗が落ちるような事柄が多く発見できます。そのことを、これからご紹介していきたいと思います。そのためにフランス国立古文書学校とミメティック[1]研究会長のブノワ・シャントル（Benoît Chantre）からの今回のお誘いを喜んで承りました。

さて、中世前期の史料を見ていくと、暴力は一般的な事柄であり、当時の社会において中心的な位置を占めていたことが確認できます。まだキリスト教化があまり進んでいなかった分、なおさらでした。なお、本日はキリスト教化に関して、殆ど触れないことにしています。なぜなら、「暴力」という題目ではありますが、こうした中世前期の古代社会の多くの要素がインド・ヨーロッパ系部族の異教の遺産であるからです。そして、こういった典型的な「古代」には、我々現代人の目から見ると驚くことが少なくありません。

インド・ヨーロッパ系部族の異教の諸民族にとっては、暴力というものはあるべき必要悪として認識されています。当然ながら、キリスト教は、「暴力」とは逆のことを教えつつあるものの、まだまだ当時の古代的な社会には、カトリックの教義は浸透していませんでした。当時の社会を見る中で、我々にとって一番興味深いことは、暴力が当時の社会を秩序づける点にあります。暴力が社会を秩序づけると言うと、驚く方も少なくないかと思いますが、なぜそのようなことがあり得えたのでしょうか？それは、暴力には両義性が存在していたからです。つまり、当時の暴力は社会を破壊するだけではなく、社会を築くためにも利用されていたということです。当時の社会ではミメティック危機が多く起こって、社会の構造的な要素にもなっていて、我々が思いのほか暴力的な社会でした。

以上を踏まえて、本講演ではジラール学という観点に立ちつつも、中世前期に発生するミメティック危機の解決方法を考えるために、いくつか事例を取り上げていきます。その上で、社会の破壊と構築がどのように行わ

れてきたかという問題への理解を深めていきたいと思います。

本講演では、以下の三つの観点から見ていきたいと思います。一つ目は母なる王妃という観点、二つ目は祭主なる王という観点、そして最後に敵対する兄弟という観点となります。結論から言うと、当時の古代社会においては、暴力という事柄は一般的なことであり、制度化されているということが見えてくるでしょう。

さて、母なる王妃という観点から見ていく前に、性に関する言語学上の問題を取り上げます。スカンジナビア地域を中心にした古代 Norrois（ノロワ）系の諸言語では、「Manisca」という言葉は女性名詞ですが、その意味は「男性」となります。古代 Norrois 系の諸言語では「日」と「月」を指す言葉は我々の西洋言語の逆で、「日」は女性名詞、「月」は男性名詞となります。

以上の事例から分かるように、当時の多くの言語では、意図的な曖昧さがあり、あえて言えば意図的に性別の倒錯が行われているわけです。つまり、これらの社会においては、男女間の曖昧さや男性女性の間の倒錯が確認できます。

こうした言語学上の問題から、古代社会は大昔の未開だった時代や、その源泉まで遡ると、母系社会だったのではないかと思います。未開社会こそ母系社会だったといえば、ときどき現代のフェミニストが異を唱えることがありますが、仕方ありません。

さて、中世前期の史料を調べていくと、母なる王妃が全権を握る事例が、驚くほど数多く確認できます。

一つ目の事例としては、よく紹介しているので、ご存じの方もいるかもしれませんが、クロティルダ王妃のものがあげられます。未亡人となったクロティルダには23歳のキルデベルトと25歳のクロタールという二人の子がおり、二人とも国王でした。あるときこの二人は母であるクロティルダを訪れて、クロティルダの孫である二人の男性を殺す許可を仰ぎました。

この二人の孫の父は先日戦死しました。その際に二人の国王は母に二つの提案をします。一人の国王はハサミを手にし、二人の孫の髪を切ることを、もう一人の国王はスクラマサクス（Scramasaxe）という剣を手にし、孫を殺すことをそれぞれ提案しました。この場面を詳細に記したトゥールのグレゴリウスは、クロティルダが二人の孫の死を執行するように命令し、二人の孫が殺されたことが明記されています。孫にはもう一人、三男もいましたが、彼は殺されず、剃髪され出家させられました。彼こそがかの有名な聖人、聖クロドアルドです。出家させられて剃髪されたということは肉体的な死は意味しないけれども、王位継承者を社会的に抹殺する方法の一つでした。このクロティルダの事例から、一つ明らかになることがあります。それは、孫を殺す許可をわざわざクロティルダに仰ぐという行為は、クロティルダが決定権を持っているということ、すなわち死刑を宣言する権力を持つ女性であったということです。つまり、母なる王妃は、例え夫の孫であったとしても、生殺与奪の権を持っていたということになります。

このクロティルダの事例は興味深いですが、類似の事例は他にも多く確認できます。

二つ目の事例としては、東ゴート王テオドリックの母エレレウヴァがあげられます。エレレウヴァという名前自体がすでに示唆的で、「戦争への愛」という意味です。つまりこの女性は、生まれながらにして、暴力を発揮することを期待されて命名されたのです。

あるとき、彼女の息子であるテオドリックが、ラヴェンナ周辺の松林で敗北したことを知ったエレレウヴァは負けた息子に対し「どこへ逃げるつもりか。あなたには勇気がない。あなたに値することはこれだ」と言いながら、ワンピースの服の裾を持ち上げながら自分の陰部を見せて、「入れ！生まれたお腹に籠れ！勇敢な戦士にも成れない屑は生まれなければよかったのだ！」と告げます。

以上の事例から、全権なる母は人を殺して命を奪うことができると同時に、生命を産む力もあることが示されています。また、女性に暴力を与え

る力もあるということも示唆しています。つまり、戦争の際、男性らの勝利のために必要な破壊的な暴力を与えるのは女性だったということです。いわゆる戦闘的な憤怒をかきたてる主体は、古代の社会では母なる王妃でした。つまり、母なる王妃は男性らの戦闘的な憤怒を始動させると言い換えることができます。

以上のような破壊的な暴力を与える女性の事例は、数多く確認されています。現代人の目から見ると驚くことかもしれませんが、歴史上では一般的な現象といえるでしょう。我々はそれらを忘れたから驚くだけに過ぎません。他にも、紀元前二世紀のウェルケラエ（Vercellae）戦の際に、ローマ人に対するチュートン戦士らの憤怒を掻き立てるために、車両の上でチュートン民族の女性たちが、皮革の太鼓に叩きながら叫んでいたという有名な場面もこうした事例の一つといえるでしょう。また、最近の事例としては、アルジェリア内乱の際、アルジェにいた方々はよく記憶に残っているかと思いますが、カスバ（アルジェのイスラム教の町）の屋上にいた女性たちの「ユーユー」という叫びが、戦闘的な憤怒を引き起こし、暴力の噴出を抑えられないものにしたことからも実感できます。

第三の事例としては、サリカ法において登場する「ストリーガ（Stryge）」という巫女があげられます。彼女らは大釜の中に、生贄として捧げられた人々の遺体を煮て、それを戦士たちに食べさせます。サリカ法における条文はこのような巫女の行為を禁じてはいますが、裏を返せばこのような巫女が存在していたことを示しています。そして、これらの巫女が野営を歩きながら、大釜から肉類のかたまりを戦士たちに投げ出す「儀式」の際、大釜を運ぶ助手がいます。要するに、人間の生贄があっただけではなく、戦士たちに肉を配る儀式が結びつけられていたのです。このような儀式は、古代資料のストラボン（紀元前の一世紀）においても確認できます。ストラボンはあるゲルマン系の一つの部族についてこう記録します。その部族の巫女は大釜をワインで満たし、全裸となっていた戦士たちが巫女の前を通りかかると、巫女はワインを戦士たちの体へ投げてワインまみれにする

というものです。これは戦いの前の儀式で、まさに敵陣に向けての戦闘的な憤怒を掻き立てるためのものでした。なお、ストラボンのこの記録の信憑性は確実で、考古学の発見による裏付けがあります。それは、ヴィクス（Vix）大釜の発掘です。この大釜の容積は210リットルもあり、その部族の戦士たちの戦闘的な酔いを掻き立てるには最適なものといえます。

以上のことから、古代の社会では、暴力を掻き立てるための方法と技術が存在したということが分かります。つまり、勝利を収めるための死をもたらす（呪術的な）力は、女性によって引き起こされたのです。

このように、暴力を引き起こす女性の存在は、数多くの事例で見られます。典型的なのはゲルマン語においてもこの現象が確認されているということです。ご存じのように、ゲルマン語で「持参金」とは、「Mitgift」といいますが、同時に「Mitgift」は「毒」も意味します。ここではルネ・ジラール氏が提供した説の一つをあげますが、「ファルマコス」、つまり薬である持参金は、同時に毒でもあるということがそこに見出されます。つまり、言葉上の両義性です。ここまでの事例で明らかなように、この両義性は、敵を破滅させるために戦士たちを送り込む「巫女」において見出されます。

ちなみに、このような両義性が強い文化や社会では、社会の構築、社会の秩序維持のために制度化された人間の生贄という現象も数多く確認できます。

考古学でも、生贄についての発見がなされています。特に、アイルランドでの発掘の成果によると、人間の生贄は最初、主に女性たちを捧げましたが、時間が経つと、今度は女性の代わりに、男性が生贄として捧げられるようになったことが判明しました。

生贄、供え物、犠牲を捧げる時、一番貴重なものを捧げることが基本です。つまり、母系社会だった古代社会では、女性こそが一番貴重な存在だとみなされたので、当然のように神々のための生贄として、女性たちを捧

げていたということも筋が通っています。そして、母系社会から父系社会へ転じていくにつれて、当然のように、生贄は優先的に男性を捧げるようになっていきます。これは考古学が示している事実の確認に過ぎません。発掘した生贄用の遺体の年月日と性別を調べて、社会制度の歴史と照らし合わせたら、このような変遷がはっきりとわかりました。

言いかえると、当時の社会においては、女性には全権がありました。夫を選ぶ権利すら持つほどでした。例えば、有名な事例として、テューリンゲン族の王妃バシナがあげられます。テューリンゲン国の森で人質となっていたキルデリク1世は、後にクロヴィス祖王の父になる人物ですが、彼が森から出発する際に、バシナは人質だったキルデリクを自分の夫にします。キルデリクはバシナを娶るのではなく、バシナによって夫に選ばれたのであり、これはまさに古典的な制度の遺産といえます。つまり、古代社会は、社会を維持して、構築して、引き継いでいく権力は女性にある母系社会であるということです。

時代は下りますが、もう一つ事例を紹介しましょう。スカンジナビアの事例でハムレットです。皆様は一応、ハムレットを耳にしたことがあるかと思いますが、実際に、ハムレット王とは誰なのかを聞くと、知っている人々は少ないかと思われます。なぜなら、ハムレットを紹介している記録は、サクソ・グラマティクス（Saxo Grammaticus、12世紀）の書物くらいだからです。簡単に言うと、仇討ちの対象となっていたハムレット王は「狂人」になったふりをすることによって、仇討ちを図る敵の手から逃れようとするという粗筋です。「ハムレット」という言葉の意味は「母系の叔父を殺した者」という意味です。つまり、ハムレットは実名ですら知られていないというわけです。それはともかく、ハムレットの悲劇はどこにあるのでしょうか。ハムレットは自分の父の殺人の仇を討とうとしますが、自分の母が父を殺した者と再婚するのです。この結果、ハムレットはしばらく姿を消して隠れなければならなくなるのですが、そのあと、自分の父を殺した者、すなわち仇を殺していきます。シェイクスピアの『ハムレッ

ト』には人類学という観点からの考察はもちろんありません。しかし、シェイクスピアはサクソ・グラマティクスの書物に忠実に沿った形で『ハムレット』を作成しました。つまり、本講演の観点で言うと、女性は自分の夫を殺した者と結婚することですらできるということがわかります。つまり、夫を殺した者に王位を与えるために、王妃はその人を選んで結婚します。要するに、女性には生殺与奪権もあるし、王位を与える特権もあるということで、いわゆる全権をもっていたということができます。

さて、以上見たように、古代社会における主権は女性にあったのですが、次の問題は「女性の主権はどこからくるのか」ということです。ご存じのように、ギリシャ語で、女性を「γυναικες」と言います。インド・ヨーロッパ系の語源は「Kounu-」となります。そして、これは転化していって、「Conu-」あるいは語尾の「—Ing」となって女性の意味をもたせられます。つまり、「Koening（王）」も同じ語源を持つのです。言いかえると、王は女神の夫だと認識されており、王位は女性から発していることが分かります。

以上のような現象は古代社会の人類学的な社会制度を特徴づける要素です。また、こういった主権の在り方はいずれにせよ制度化された徹底的な暴力をもたらすこともさきほど紹介した通りです。また逆に言うと、暴力がはびこるとこういった母系社会を産むということもできます。つまり、最初に母が存在し、この女性は生命の源泉でもあり、死の源泉でもあるとされていました。そこには、不可避な流れがあるとされていて、生死の交代で社会は成り立つとされていました。

以上の結論を確認するためには神話や叙事詩などを見ていくのがよいでしょう。一つ事例を取り上げると、アイルランド（ケルト）のメイヴ女王は九人の国王と性交を結びます。なぜなら、性交を結ばなければ、彼らには王位を与えられないからです。つまり、メイヴ女王と結んではじめて、これらの九人の国王は王となるわけです。同じように、ケルト神話に登場するブリギッド女神は父であるダグザの母であると同時に娘なのです。こ

のように、ブリギッド女神は主権を所有しているわけです。

また、先ほど触れたサクソ・グラマティクスの書物においても、ある姫の話が出てきます。その姫はいつも勝利をもたらす存在なのですが、ハムレットを訪れると、ハムレットに言います。「我が夫になれ。私が王であり妃である。」と。つまり、両性を持った存在であり、起源にまで遡れば、神話において性別はないとされることも多いです。こうした事象は、神話を見ていただくと簡単に確認できます

以上、母なる王妃をご紹介しました。

次に祭主なる王をご紹介していきたいと思います。

祭主なる王についても、母なる王妃と近い現象が確認できます。祭主なる王を中心に据えた社会制度に関して詳しく記された史料として4世紀のアンミアヌス・マルケリヌスの書物があります。ブルグント族とゴート族に関する記録です。

アンミアヌス・マルケリヌスによると、ブルグント族の国には王が二人います。いわゆる（ジラールが考察した）「二重機能」がそこには示唆されています。つまり二人の王がいますが、一人は「Hendinos」あるいは「Kindins」と呼ばれています。後者は「Koening（王）」の類語です。そして、もう一人の国王は「Sinistus」と呼ばれる祭主なる王です。このSinistusは終身王です。それに対してKindinsという王は戦で負けたら部族によって廃位されることがあります。また、Sinistusは部族によって選ばれることもあって、そして祭主なる王と戦士なる王が統合されることもあります。祭主と戦士との二重性は時代が下ると統合されて、戦士なる王の性格の方が強くなっていきます。祭主なる王は呪術的な力を持ち、そうした魔力のお陰で、祭主なる王は戦で勝利を収め、部族に繁栄をもたらし、更には女の腹を身籠らせるのです。古代社会における王権の三つの典型的

な権能というか、力です。

こういった古代の制度から一つ再考すべきことがあります。それは、フランスの歴代国王の恋愛事件に対し、我々フランス臣民が寛容であるという伝統は、そうした古代社会の遺産ではないかということです。意外に、とても古い伝統ですが、古代社会における「祭主なる王」の延長線にあるように見えてなりません。

さて、このような社会において戦で敗北した場合や、急な飢餓や災いが訪れた場合、あるいは女性らが身籠らなくなった場合、選ばれた祭主なる王は必ず廃位させられるのです。いわゆる、ミメティック危機が起こるのです。自国民を救うために、あえて言えば国を復興するために、祭主なる王は生贄として捧げられます。こうした王を生贄にする事例はことにスカンジナビアの部族の間によく確認されており、例えばウプサラでは、王が生贄されたことが確認されています。部族に災いや天変地異が訪れると、国王は生贄として捧げられたのです。また、叙事詩などの史料の表現を借りると、王の生贄は「豊穣」のために捧げられると記されています。また、王を殺した人々は、その王の血をウプサラの神殿の前に並ぶ歴代国王の座へ投げかけます。これは繁栄、豊穣、利益（りやく）といった幸福を、福神に願うための生贄でした。つまり、王を処刑する人々は崩れた社会の均衡を取りもどす人々でもあります。このように、神々の座に血を投げかけることによって、災難などが除かれ、社会の復興のつながるとされていました。

アイルランドとグレートブリテン島には、スカンジナビアの王がよくやってきました。850年から880年の間、戦争や政治的に介入するために、上陸してきたのです。彼らは、戦争に勝利した際に、アイルランドのサクソン族の王たちを捕らえていきました。そして、捕らわれた王は、スカンジナビアの部族によって生贄として捧げられたわけです。興味深いことは、負けたアイルランド側の史料は勝ったスカンジナビア側の史料の傍証となることです。アイルランド諸王は溺死させられた後、身を細かく刻んでひ

き肉にされ、首も斬られて、杭の上に差し込まれるといったありさまでした。それは戦いの結果を忘れないためでした。また、捕われたアイルランドのレスター王は岩の上で背を砕かれました。具体的には、大きな岩に王を落として背を砕かれて殺されました。別の史料には、次のような描写があります。「血の赤色はこの岩に残って今でも見える」と。言いかえると、岩が赤色に染まっているお陰で、王が実際に生贄になったことが示され、それにより新しい均衡が構築されることとなったことが示唆されています。

神々への王の生贄は部族に勝利や繁栄や安泰をもたらすためにあるということです。

以上の事例は知られている限り、欧州においてもっとも古い異教の地域であるスカンジナビアにおいて確認されています。しかしながら、驚くべきなのは、同じ時期の大陸でも同様の事例が確認されるということです。なぜなら、スカンジナビアよりもキリスト教化が進んでいる（ヨーロッパ）大陸においても、ゲルマン族が入って来ると、スカンジナビアで確認されるような事例が確認できるようになります。

史料においてかなり強調される事柄ですが、キリスト教との接触後、疫病として「ゴート病（Morbus Gothicus）」が描写されています。この「ゴート病」とはどのようなものなのでしょうか？これは、ゴートにおいて王は、選ばれた王でありながらも、廃位させられそして殺されるという根強い慣習を指すものです。東ゴートにおいても西ゴートにおいても、王位継承は世襲制ではありませんでした。こうした王を廃止して殺したという事例は、数えきれないほど多く存在します。今回は一人一人の王殺しの事例を細かく紹介する時間がありませんが、廃位させられ殺された西ゴートの王をリストアップしましょう。アタウルフ、シゲリック、テオドリック、テオドリック二世、アマラリック、テウディス、テウディギセル、アギラ1世、リウヴァ2世、ヴィテリック（Wittéric）王、そしてトゥルガ（Tulga）王

はキンダスウィント（Chindaswinthe）王によって廃位されました。その時、確実に状況を安定させるために、確実に国の繁栄につなげるために、上流貴族200人と他の貴族500人も含めて殺されました。つまり、繁栄を取り戻し、新しい社会を構築するための真なる王位継承者を生み出すために、あらゆる王胤の子孫を徹底的に根絶させたということになります。

以上の話と全く同じような事例は他にも多く確認されています。例えば、ランゴバルド王国のアルボインとクレフがそうですし、一番典型的でしかも興味深い事例としては、メロヴィング朝のガリアがあげられると思います。

具体的な事例をあげる前に、一つの紹介したいことがあります。フュステル・ド・クーランジュは『フランク王政』[2]において、メロヴィング朝を分析しながら、少し変わっていることに気づきました。なぜなら、フュステル・ド・クーランジュは次のように言っているからです。「フランク王政は専制政治だが、殺人によって穏健化されている」と。評価は興味深いです。確かにその通りというか、メロヴィング朝での出来事を単純に並べて見ていくだけでも、面くらうようなことばかりです。しかしながら、整理してみて考え直すと、これらの殺人は社会を復興させ、元の均衡を取り戻すための、身代わりとしての生贄の必要性ということに由来することがわかります。

メロヴィング朝の三百年間を見て数えてみると、歴代国王は在位中に11人刺殺されています。少し特殊なブルンヒルド王妃の処刑も含めると、12人となります。ブルンヒルド王妃は裁判にかけられて、10人もの王を殺したという罪で死罪となりました。（また東ゴート王国でも同じようなこともありました）。つまり、当時においては国王の排除とともに、国王を裏切った結果、王妃も裁判にかけて排除する事例があったということです。王妃が死刑となった理由は、あえて言えば、王族全体の殺し合いを引き起こしたことを罪に問われたといってもよいでしょう。ちなみに、ブルンヒルド王妃の処刑方法は、後世に大逆罪に適用されるような極刑の始まりだとさ

れています。四頭の馬に肢体を結び付け、そして馬を走らせて体を裂く方法で、この事例が初登場です。つまり、1750年代にダミアンが大逆罪で受けた極刑には長い伝統があり、インド・ヨーロッパ系の古代社会の慣習に由来しているのです。6世紀のヨルダネスの書物をはじめとして、同時代の数人の作家によって、このような慣習が描写されています。

こうした事例から、メロヴィング朝も「ゴート病」にかかっていたということが分かります。一旦数世代飛ばして、7世紀の話に移ります。672年―675年、国王、キルデリク2世は三つのフランク王国を改めて統合することに成功しました。メロヴィング朝において、三つの王国が一人の国王によって纏めて統治されたのは、キルデリク2世が最後です。しかしながら、キルデリク2世もかなりすさまじいミメティック危機に遭いました。キルデリク2世は、ローニュ(Lognes)の森において、配偶者であるビリキルディス王妃と一緒に追われます。そして、可哀そうなことに二人は敵によって追いつかれ、その場でキルデリク2世だけではなく、妊娠していたビリキルディス王妃も腹を裂かれた上で殺されたのです。結局のところ、このような殺人は単なる殺人ではなく、儀礼です。宗教的な儀式であり、異教の儀礼の遺産です。ミメティック危機を解決するために、統治者に値しなくなったとされる国王を生贄に供するという古代社会らしい儀式です。当時の国の財政は困難を極めていたものの、その危機を乗り越えるために有効な政策を実施しました。例えば、金の通貨を銀の通貨にしたように、評価の切り下げをするなどし、危機を何とか解決させました。ですから、わざわざ国王を殺さなくてもよかっただろうと思われても当然でしょうが、実際はそうはなりませんでした。ミメティック危機は別次元のものであり、史料に残されなかった何らかの人物によってミメティック危機が引き起こされると、ミメティック危機こそ他の事情より優先され、国王の犠牲を必要としたということになります。

679年にもまた同じような事象が発生します。国王、ダゴベルト二世はアイルランドへ追放されました。そのとき、殺さないものの、追放という

手段が選ばれたのでしょう。ですから、国王の身柄は何らかの事情があってアイルランドの部族に委ねられたのですが、ある時、彼はフランスに戻って、北ガリアの王位に改めて即位しました。そして、彼もミメティック危機の犠牲となりました。なぜなら、彼も、ヴォエヴル（Woëvre）の森で追われて、最終的に暗殺されるという顛末となったからです。そして、数年後、国民によって崇敬されるようになって列福されて、聖人と崇められるようになりました。このように、ミメティック危機の犠牲となった王が崇められるという慣習は、少しずつ古代の文化が変遷していくことで垣間見せるのです。（例えば）ストゥネ（Stenay）という町において崇敬は始まり、その後、教会によって追認されたことで、聖ダゴベルト二世として現代でも崇敬され続けています。

以上のように、ミメティック危機は限りなく相次いでいきます。それは、一旦破壊力を発揮して、そして次に、建設的となっていきます。つまり、政治上の問題が生じるたびに、当時の社会ではその問題を乗り越えるための手段として、多くの場合は古典的な方法が採用されました。しかし、古代のロジックで解決しようとすると、切りがなく解決には至りません。ここまで、母なる王妃が死と生をもたらし、祭主なる王は社会を復興させるために儀式的に殺される慣習があったことを述べてきました。

次にあげる三つ目の解決方法は敵対する兄弟です。

先ほどご紹介したように、古代社会において、主権は女性にありました。その結果、王妃から命を貰った男子の全員は自動的に「王」となります。そして、母なる王妃から生まれた女子の全員は「王」を産む能力があります。（神聖なる血統なので、血統を汲むのなら神聖なる存在となるというロジック）。つまり終わらない連鎖のように、王たる神聖性を創造し続ける血統ということになります。こうした神聖性を継承するために、婚姻なども含めたあらゆる手段が使われています。厳密に言うと異教の世界ではキリスト教で理解されている「結婚」という制度にはなっていませんが。

そして、権威面においては、王位に就くには母なる王妃こそが鍵となり

ます。つまり、継承においては、王妃が王位を与えるのです。あえて言えば、王妃は「王位」や「王統」を創造する存在だとされているのです。少し乱暴な言い方ですが誤解をおそれずに言えば、「王は殺される存在、王妃は生み出す存在」だということができるでしょう。当時の社会においては、社会を維持するためには、この選択肢しかなかったのです。

さて、息子たちは一体どうやって即位するのでしょうか。ひとつ王位継承の方法をあげたいと思います。それは、ケルト文化圏から来る「Tanistrie(タニストリー、兄弟相続)」という王位継承制度です。「タニストリー」というのは、基本的に、「第二の継承者」によって王位を継承するということです。つまり、第一の王子が即位し、次に第二の王子が王位を継承し、次に第三の王子が王位を継承していく、という制度です。(つまり、国王に子供がいても、それらの子供は敢えて即位せず、同じ世代の兄弟の順で王位を継承していくことになります。)この王位継承制度は「タニストリー」の第一形態で、「継承形のタニストリー」と呼ばれています。「継承形のタニストリー」はそれほど採用されておらず、ヴァンダル族においてのみ採用されました。それについてヴィタのウィクトル(Victor de Vita・五世紀)による示唆的な資料があります。そこには、アフリカを拠点にしていた当時のヴァンダル王であるガイセリックの王位継承が、どうやって予定され、実施されたかが語られています。かいつまんで説明すると、ヴァンダル族では、王位は兄弟の順で継承されていきます。そして、上の世代の男性全員が即位して、亡くなったら、次世代の長男へ王位を継承し、また同じように兄弟の順で王位継承がなされていきます。

以上の王位継承は成り行きに任せて行われていたのではなく、制度化されていたことがヴィタのウィクトルの書物で分かります。そして、ヴァンダルの王政に関する資料を見ていくと、こういった王位継承の制度が、適用され続けたことがわかります。では、なぜこういった王位継承制度が採用されたのでしょうか。そこには一つの大きなメリットがあったからです。

それは、この王位継承制度の場合、在位中の国王が戦場で死亡しても、新しい国王がすぐ戦えるように備えられるということです。なぜなら、次王は前王の弟となるのですから、年齢的に言っても殺された王との年齢差は二、三歳といった場合が多いでしょう。そのため、即位後すぐに戦士として機能し、指揮官となれます。つまり、この制度は、子供が国王になることを避けるためのものです。この意味で、「継承形のタニストリー」という王位継承制度は、軍事上に限っていうと非常に効果的です。

ところが、ヴァンダル族の場合、この王位継承制度は長く機能しませんでした。王族の間に内乱が起こって、王位継承権を要求する王族たちが現れたからです。ヴァンダル王政の破滅の原因は、もちろん直接的なものとして、ユスティニアヌス皇帝によって送られたベリサリウス将軍に率いられたローマ軍に対する敗北もありますが、ガイセリック王族内の継承の不安定さに起因する内乱も大きな要因でした。

それから、王位継承制度として、タニストリーのもう一つの形態はより広く採用されました。「同時性のタニストリー」という形態です。これは、在位の王の王子全員が、王国を分割して王位を継承していくものです。（しかも名目上王国の統一性は否定されていないのです。）では、この王位継承制度のメリットはどこにあるのでしょうか。理論上は兄弟の間の和の維持をもたらすはずですが、実際の歴史を見ると逆に不和と争いを繰り返しています。兄弟の間の殺し合いをもたらしただけではなく、ある兄弟が殺されると、その兄弟の王妃と息子たちを奪って、その王妃を娶るのです。それは殺した側が殺された側の王位継承権を自分のものにすることを保証するためです。

要するに、「同時性のタニストリー」は、切りのない暗殺の連鎖をもたらしました。こういった悪循環は初期のクロヴィス祖王の時代から確認できます。クロヴィスは亡くなる前に、全力を尽くして王位継承権者を探し求め、見つけ次第、一人ずつ殺していきます。そして、王位継承権者を殺しすぎた結果、子孫も継承者もいないことに気づき、絶望しながら遠戚を

訪れて、王統の血を引いている者を探すのです。

面白いことに、これらの話を記すトゥールのグレゴリウスは言い加えます。「クロヴィスがこのように、遠戚を訪れて聞いたのはまだ発見されていない未知のメロヴィング朝の血を引いている者に王位を継承させるためではなく、生き遺した王位継承者を殺すためだ」と。

つまり、ここまで述べてきたクロヴィス祖王による継承者殺しは、十分に考えられた政策といえます。彼にはどうしても、あらゆるメロヴィング系の諸王の子孫の男子を殺す必要がありました。そのため、クロヴィスは遠近戚を問わず、彼らが無名の女との間でも生まれた王胤の男子らを殺すことにしていたのです。継承者を一掃するというか、王位継承を確立するために王位継承権の問題を「綺麗」にするというかといったところでしょう。つまり、クロヴィスの直系の男子の子孫しか残さず、彼ら以外が王位継承できないようにしておいたということです。そして次世代になると、王子たちも「同時性のタニストリー」を採用していきます。

その後、クロヴィス祖王が亡くなると、クロヴィスの四子の間で王国は分けられます。長男はクロティルダから生まれてはいないのですが、残りの三人はクロティルダの子供です。こういった王位継承の慣行は旧ローマ帝国において土着化していった当時のゲルマン系の諸民族の間に非常に普及しています。さらに言うと、フン族においても王位継承制度は「同時性のタニストリー」となっています。ある意味で当然といったら当然です。なぜなら、フン族はより遠い東洋に由来するため、古代ローマとの接触が長かったゲルマン系の諸民族よりも、古典的な社会要素が濃厚となっているからです。

他には東ゴート王国においても、メロヴィング朝と全く同じ慣行が見られます。つまり、東ゴート王国の建国はゴート族から独立したという形になりますが、その時、王族の兄弟三人が選ばれて即位していきます。ウァラメールとウィデメールとティウディミールの三人兄弟です。兄弟王と呼ばれるのですが、このように王位継承制度としてこの慣行が採用されてい

ます。つまり、最初からそうした継承順序の基準がありました。

このように、同じような慣行が多くの当時の民族に確認できるわけです。アングロサクソン系の諸王にせよ、アイルランド系の諸王にせよ、ブルゴンド系の諸王にせよ、ランゴバルド系の諸王にせよ、テューリンゲン系の諸王にせよ、みんな、同じ「同時性のタニストリー」という王位継承制度を採用していますが、ここでは詳しい話は割愛させていただきます。

以上のように、メロヴィング朝とカロリング朝の長い間に、「同時性のタニストリー」という王位継承制度は広く採用されていました。カロリング朝になってもやはり「同時性のタニストリー」がかかわっていました。シャルルマーニュ王は一人っ子だったということが、かなり王国にとって有利に作用したことを気づけたはずですし、またその一人息子、敬虔王と呼ばれるルイも王国を分割することなく王位を継承することができました。しかし、それも無駄に終わってしまいます。なぜなら、次の王位継承になって、改めて「同時性のタニストリー」を採用してしまったからです。敬虔王と呼ばれるルイは自分の息子の間に王国を分割するのはごく自然なこととして認識していたようです。そして、その後もカロリング朝の王位継承の慣習が変わらなかった結果、ヴェルダン条約に至って、帝国は決定的に分裂してしまいます。多くの専門家にとっても、このヴェルダン条約には謎が多いのですが、それはともかく、このヴェルダン条約は決定的な結果を伴いました。なぜなら、その分割によって帝国は三つに分けられることになり、それ以降再び統一されることはなかったからです。中央にあったロタリンギアは、後に東フランク王国と西フランク王国の間で奪い合うことになります。

このように、「同時性のタニストリー」という王位継承制度は、かなり粘り強く存在しつづけたわけです。さらにいうと、カロリング朝以降もやはりその遺制は存在します。「同時性のタニストリー」をそのままに実施しようとした事例としては、コンスタンス王妃があげられます。コンスタンス王妃（11世紀）はアキテーヌ出身でローマ系の人だったのに、なぜこ

のような王位継承制を実施したかについてはいまだに私にはわかりませんが、実施しようしたことは事実です。なぜなら、敬虔王と呼ばれるロベール2世が亡くなってから、王妃だったコンスタンスはとても狭かった王領を二人の王子の間に分けようとします。当時の王領はサンリスからオルレアンまでの地域に過ぎなかったにもかかわらず、なぜかコンスタンスは敢えて二人の王子の間に分けようとします。しかし、結局実現せず、長男が継承しました。

「アパナージュ・親王采地」という制度がまさにそうです。12世紀のルイ7世は、初めてこの制度を確立していきますが、それはフランス革命まで続きます。特に14世紀の善良王と呼ばれるジャン二世も「親王采地」を広く採用しましたが、その結果、ブルゴーニュ公の成立に伴って次世紀のブルゴーニュ派とアルマニャック派の内乱を引き起こす大きな要因となりました。思い出してください。「親王采地」という制度は、国王となる長男を除いたそれぞれの兄弟の間に、封領という形で王国の一部を下賜するというものです。これまでの話で明らかなように、メロヴィング朝時代からあった、ゲルマン文化に由来する異教の遺制ともいえる「同時性のタニストリー」を、緩やかにした形で（王国を分割するのではなく、王位の帰一性は保たれて、王国の統一も保たれながらも、封領だけを与えることによって―この事例で国王が同時に最高領主と国王を兼ねていること、つまり封建制と王位の二重性はかなり見える）継続させたと言えましょう。そして、やはり悪い制度には悪い結果が必ず伴うように、ジャン二世は「アパナージュ・親王采地」を実施した結果、ブルゴーニュ公国ができて、大変なことになりました（内乱の上に英国の侵略もあって、滅亡の危機に瀕しましたが、ジャンヌ・ダルクによって救われました）。このようなすさまじい結果は、フランス国王を裏切った1527年のブルボン公の暗殺まで続きました。

つまり、直系長男という健全な王位継承制度の成立は、古代のこの慣行によって長く妨げられたわけです。

ここまで述べてきたように、敵対する兄弟というのは、ゲルマン系の諸王国にとって常に災いと不幸をもたらしてきました。フランク王国の場合、クロヴィス祖王の長男のテウデリク（ティエリー）が、特に分かりやすい事例と言えます。ある日彼はキルデベルトを暗殺するために、壁布の裏に刺客を隠れさせたのですが、慌てすぎたために、壁布が地面まで届かず、刺客の足が見えていたことに気づかなかったのです。その結果、暗殺は未遂に終わったのですが、ここで示したかったのは、このような王位継承制度のせいでどれほど馬鹿げた内乱や争いが起こっていたかということです。何はともあれ、このような王位継承制度が理想的ではなかったことは明かでしょう。歴史家のすべきこととしては、なぜそういった制度が採用されたのかという問いに答えることでしょう。特にテウデリクとクロタール1世がお互いを殺そうとしていたことからも分かるように、王族内の殺し合いへ展開していく傾向は強かったのです。トゥールのグレゴリウスはメロヴィング朝を中心にフランク王朝のすべての出来事を、細かく一つも漏らさずに詳しく記しています。

面白いことに、トゥールのグレゴリウスはこういった争い、殺人に関する出来事を語り終えると、かならず「Tedio Mest mi 」と言いますが、これを訳すと「うんざりだ！もうたくさんだ！」という意味になると思います。つまり「もう、切りのない家族同士の争いの話を記録するのはうんざりだ」と言わんばかりです。「一体なぜ、彼らはお互いに争いを終えず、殺し合おうとするのか」と言わんばかりです。トゥールのグレゴリウスはそういったありさまを説明するために、一つの理由を取り上げるのみです。ここから、トゥールのグレゴリウスがどれほど古典的な教育、つまりローマ風の教育を受けたかが見てとれます。トゥールのグレゴリウスでは、「Bellum Civile」つまりは「内戦」であると説明します。彼はユリウス・カエサルの「De Bello Civile（内乱記）」を思い浮かべたに違いありません。つまり、トゥールのグレゴリウスは、ゲルマン人の慣行に起因するものであるとは、全く思いつきようがなかったのでしょう。この結果、以上のよ

うな「なぜ」という彼の心に付きまとう問いに対して満足できる答えを出せていません。トゥールのグレゴリウスの書物においては、毎度「内戦」だということで争いの原因を説明しようとします。面白いことに、出来事を見るだけでも、統一された王国では内戦は起こらないということに気づけたはずです。国王が一人になると争いもなくなるという単純な事柄を確認すればよかったのです。クロタール二世にせよ、ダゴベルト一世にせよ、統一された王国を統治しますが、何の争いもなく統治をしていきます。

以上のような争いの原因を把握するために「内戦要素」以外にも何か別の要素があるのでしょうか？

先ほど申し上げたように、一人を除いたすべての国王が亡くなり、ただ一人の国王のみに治められる時代こそが、安定的な時代だったのです。それなのに、一体なぜ、よい帰結にならないことが分かっていても、しつこく次の王位継承の時にはまた男子の間で分けようとするのでしょうか。

この問いに答えるために一つ注意すべき点があります。トゥールのグレゴリウスを一句一句精読する必要がありますが、彼の書物は次のことを明確にしています。それは、ミメティック危機が起きるたびに、国王は獲物のように森で狩られて、殺されるまで追われている場面が明記されているということです。やはり、どうみてもこれは儀礼です。祭主なる王の殺人儀礼です。先ほど申し上げたように、ローニュ（Lognes）の森とヴォエヴル（Woëvre）の森においてキルデリク2世とダゴベルト二世はそれぞれ殺されました。また同じように、王が殺されるたびにグレゴリウスは記します。〇〇の森で可哀そうな王が狩猟用のラッパの音に追われて犠牲になったと。つまり、明らかに殺される王を獲物にまでおとしめられています。また、そういった王から獲物への変化の結果として、王は殺されます。まさに消えるべき祭主なる王の役割を果たすということです。このように、他の事例でも同じようにみることができます。そして、敬虔王のルイの時代になって、ようやくそういった慣習に対して解決策が考えられました。つまり、敬虔王のルイは生き残った唯一の男子だったものの、異母兄弟た

ちがいました。問題はこれらの異母兄弟たちが王位継承権者だったということです。その中で敬虔王のルイはどうしたのでしょうか？結論から言うと全員を剃髪させました。つまり、（王位を具現化していた）髪の毛を切らせて、修道院に送ったのです。カロリング朝になってキリスト教化が進むと、殺される代わりに出家で済むようになります。剃髪自体はメロヴィング朝のキルデベルト1世の息子の一人のためにはじめて採用された方法ですが、カロリング朝になるとこの方法はより頻繁に採用されるようになります。しかしながら、結局、敬虔王のルイの決定は解決策とはなりませんでした。なぜなら、最終的に、三人の息子の間に王国を分けることにしたからです。いわゆるヴェルダン条約ですね。他にもシャルルマーニュは別の方法での解決を図りました。それらの出来事を記したアインハルト（エギナール）には、シャルルマーニュのやっていることが理解できないわけですが、特にアインハルトは驚きながら次の指摘をします。要約にはなりますが「シャルルマーニュは徹底的に自分の娘が嫁がないようにさせた」と。また、「エクス・ラ・シャペルの宮殿に王女を引き籠らせたのです。このようにしてシャルルマーニュにとって不幸なことになり、王女の悪行という不運にあった」というふうにも記します。まさにその通りで、シャルルマーニュの王女たちは恋愛冒険などを経験しましたが、その中には多少喜劇のようなものもあれば、悲劇のものもあったのです。では、シャルルマーニュはなぜ王女たちを嫁がせないようにしたのでしょうか？それは、娘たちが王を産むことを恐れたからです。つまり、将来の内戦の種になることを懸念したのです。

さて、ここまで述べてきたような問題解決への試みがありましたが、結局ヴェルダン条約による国土の分割に至りましたので、王位継承制は変わりませんでした。

もし時間があれば、以上の方法を用いて敵対する王妃について、あるいは「フェーデ（Faide、Fende）」すなわち義務化した仇討ちについての分析もすることできます。こういった古代の制度も非常に面白いのですが、

時間の都合上今回は割愛せざるを得ません。

では、総括に移ります。結びに代えて、本日に触れた課題の結論を述べていきます。つまり、母なる王妃、祭主なる王、敵対する兄弟について人類学的な分析を行った結果、何が見えてきたのでしょうか。

まず、皆様もお分かりだと思いますが、王妃も王も生死を司る存在であったということです。言いかえると、王と妃にはこの上なく神聖性が付属され、神聖なる性格が強いです。また、これらの王政において何らかの危機があるたびに、ミメティック危機が発生し、その度に虐殺が起こりますが、一点注意していただきたいのは、王の息子と娘は必ず生まれながら王であり妃であるわけです。面白いことに、こういった単純な事実の確認は、トゥールのグレゴリウスの書物を出版した専門家ですら、理解していなかったのです。中でもドイツ人の専門家が編集した、ウィリアム・アーント（Wilhelm Arndt），ブルーノ・クルシュ（Bruno Krusch）における誤解の話が興味深いです。ラテン語の写本をわざわざ変えた結果、もとの単語の代わりに間違った単語を入れてしまったという話です。特にカンブレー写本の話ですが、トゥールのグレゴリウスはある時、ゴンドヴァルト（Gondovald）なる王について記しました。ゴンドヴァルトはおそらくメロヴィング家の一員だったと思われる王なのですが、ドイツ人の編集者は写本に明記されているラテン語の「Rex －王」を消して、「Dux―公」と入れ替えました。ブリュッセルの「ベルギー王国図書館 KBR」で私は元の写本を閲覧して確認しましたが、Dux ではなく Rex と書いてあります。しかしながら、そのゴンドヴァルトは即位も統治もしていなかったわけです。つまり、当時の理解では王の男子なら、統治していなくても「王」という称号を名乗って、（王権を象徴していた）長い髪の毛を伸ばして、王位継承権者であることを示していたわけです。繰り返しになりますが、王と妃は生死を司る存在であり、廃位される王、あるいは不倫した王妃を対象とした四つ裂きの刑という王殺人の儀礼もありました。また、このよう

な死刑の執行によって、繁栄と安泰がもたらされるという認識もうかがえます。スカンジナビア系にせよ、ケルト系（アイルランド）にせよ、ゲルマン系（メロヴィング朝）にせよ、いわゆる完全に異教なるインド・ヨーロッパ系の古代文化から生じたこれらの諸制度はキリスト教と独立した形で並続していったのです。しかも、キリスト教が正式に国家の宗教になったメロヴィング朝のガリアにおいても、こういった遺制は存続しました。たとえば、クロティルダは自分の孫の殺害を命令した後、自分がやったことに気づいて、深くその罪を悔い改め、臨終の時までの13年間は、トゥールの聖マルチンの修道院で出家して、罪を贖おうとしました。

以上のような制度などを理解するためには、より前提的な話に戻る必要があります。つまり、崩れた秩序を取り戻すために、王を生贄にしなければならないという考えに至らせる価値観に立ち戻る必要があるのです。私がまだ学生だった頃の1954年の講演で、アンリ・マルー氏に教わったことを思い出します。シャンポリオン教室での学部の授業でしたが、後に有名になる祭主なる王、ネミの話です。マルー氏はローマのフランス学校で数年滞在したので、丁度ネミの遺跡の発掘現場にいました。そこで、特に綺麗なガレー船が発見されました。それは、ネミ臨時王国の王へ進貢された船でした。ジェームズ・フレイザーに引用されている「金枝篇」の文章には、ネミ王国の王が元は奴隷だったこと、前王を殺したことによって王位に就いたことが記されています。そして、彼は王を殺すことによって、王位に就いたのですが、また別の奴隷が彼を殺して、彼の代わりに王となるといった流れとなります。こういった切りのない逆転現象の悪循環ですが、生より死が生じ死より生が生じるという流れ、また権威・権力が常に脅かされ、死と深くつながっていることが分かります。そして、こういった未開の社会において、新しい秩序は、国王やその側近の人々の死によってつくられたということです。つまり、これらの非キリスト教の社会では、暴力こそが社会の和を維持するための源泉であったという逆説的な事実が浮き彫りになったのです。

以上、ご清聴ありがとうございました。
（拍手喝采）
〜〜

（ブノワ・シャントル、ミメティック研究会会長）興味深い講演でした。中世前期社会への理解が深まったかと思います。確かにトゥールのグレゴリウスを読むと繰り返し繰り返し同じような出来事が起きるので、ちょっと気味が悪く単調に見えるのですね。

（ルーシュ教授）まさにその通りですよ。トゥールのグレゴリウスは「飽きた」と手を上げるほどです。

（会長）また、その暴力を見て、理由を見つけようとするところも面白いですね。こういった社会の基礎となった暴力は古代末期から中世前期まで確認されていますが、意外とこういった遺制は長く続いたのですね。
　さて、これから質疑応答に移りたいと思いますので、録音のためにマイクを渡します。

（質問）広い展望を提供してくださってありがとうございました。トゥールのグレゴリウスについてですが、彼は相次ぐ争いを見てうんざりしたというのですが、キリスト教の司教であった彼が、王たるキリストが、奴隷のようになって殺されるべき存在となるように、王もそういった存在であることを理解しなかったのは私には不思議に見えます。しかも、歴史家というだけではなく、神学者でもあったのでなおさらのことです。

（ルーシュ教授）たしかに、その関係づけはしていませんね。彼はその類似性を見出さなかったのでしょう。20世紀に入って、こういった類似性の指摘は初めて見られましたね。

（質問）講演中、暴力を鎮めるために剃髪という手段が取られたと指摘されました。それでは、剃髪という解決方法はキリスト教から来る方法なのでしょうか？なぜなら、中世後期において、またかつての田舎での家族においても、よくあった話なのですが、相続の時の争いを避けるために、一人の子が相続して、一人は修道士となって、娘も出家するという例が少なくないですよね。実際、私の叔父にもこのようなことがありました。剃髪というのはキリスト教的な解決方法なのでしょうか。

（ルーシュ教授）はい、キリスト教的な解決方法です。なぜなら、剃髪した時点で、貞節を守り、子孫を産まなくなるからです。つまり、継承者は生まれないわけです。ある意味で心理的な去勢であると言えましょう。ここまで述べてきたように、それによって次世代が楽になります。剃髪した子孫と継承権を争わずに済むからです。なぜなら、キリスト教では出家する人には（結婚もできないし、性的行為は厳禁なので、）継承者は生まれないわけです。剃髪した継承者の分はいずれかが家へ戻ります。ですから、これはキリスト教的な解決方法だと言えます（他の宗教では出家しても厳かに子孫を持たないとは限らないので）。特に注意すべきことは、聖別された独身生活、つまり修道士女や童貞の聖別は、最初から結婚できないことを強く意味したことが分かります。それを示すのは、385年、シリキウス教皇の教皇令であり、そこでは司祭の結婚を厳禁としています。

（質問）素晴らしい講演を拝聴できて感謝しております。泥炭地のミイラ[3]について一言いただければと思います。なぜなら、最近の研究で考古学者はこれらのミイラは犠牲になった王だったと思うようになったからです。

　また、第二の質問として、兄弟を皆殺しにする解決方法はトルコ人でも確認されていますが、何かの関係があるのでしょうか。

（ルーシュ教授）おっしゃる通りですね。こういった慣習は遊牧民族なら広く確認できる慣習です。フン族でもトルコ族でも確認されています。

そして泥炭地のミイラですね。アイルランドでの考古の発掘調査などは示唆的です。泥炭坑で生贄として捧げられた人々はミイラにされた形で発掘されましたが、それだけではありません。死んでも力強い霊力があると考えられており、それを防ぐために、遺体の乳首が斬られています。これは2・3年前ぐらい、アイルランド発掘調査で発見された事例です。

ですから、女性にせよ男性にせよ、人間の生贄の目的は社会の秩序をつくるためでした。全員が受け入れた暴力によってこういった和が保たれたということです。ちなみに、多くの場合、人間の生贄はよく人喰いをも伴います。宗教的な人喰いです。

（質問）ありがとうございました。さきほど泥炭坑のミイラの話が出ました。それと関連して、デンマークの泥炭地で発掘されたグンデストルップの大釜なのですが、そういった生贄に利用されたでしょうか？

（ルーシュ教授）きっとそうです。特にグンデストルップの大釜の場合はその通りだと思われます。なぜなら、大釜にはある場面が浮彫られています。それは、一人の巫女が一人の男性を手にして大釜に入れ込むという場面です。

これは生贄が実際に行われたことを証明します。そして、興味深いことに、グンデストルップの大釜の装飾はストラボンの記録を傍証しているわけです。それらの史料を参照したい方は、アッティラについての書籍に載せておきました。原文もあります。ストラボンの記録は非常に興味深いです。

（会長）大釜の話になりましたので、昔、ヴァルター・ブルケルト（Walter Bukert）の本に記されていたことを思い出しました。古代ギリシャにお

ける生贄についての本ですが、炊くための道具が大釜になっているということが書かれていました。そこでは、大釜であるということには理由があるのでしょうか。もちろん、技術上の理由は理解しています。大きく、しかも当時の技術で作りやすい道具なので便利だったのだろうと思います。そして、そこに人間の遺体のかたまりと何らかの液体を入れて、煮ていたのだろうと思われますが、そもそも大釜を使うということに意味があるのでしょうか？なんか後世の魔女の大釜につながるような気がします。

（ルーシュ教授）そうですね。大釜は私に言わせれば宇宙、地球自体を象徴しており、半球の大釜は宇宙を示しているでしょう。そして、宇宙の中で生死が創られるという象徴性があるでしょう。あくまでも仮説ですが、大釜が古代において非常に一般的なものとして普及したことも考えると、そのような象徴性で理解されたことも少なくないでしょう。なぜなら、ヴィクス（Vix）で発掘された大釜はセルビアでも発見されたし、発掘調査ではよく発掘されるわけです。200リットルの大釜はかなり一般的に使われたと思われます。今後の研究課題ではありますが、人間の生贄のために使われた道具を網羅的に分析する意義があると思われます。

（会長）ありがとうございました。先生の解釈は腑に落ちます。私の理解は所詮実証学的な解釈の域を越えないのですが、大釜を使っていたということは、前提としてそういった道具を作る技術があった一方で、他の容器をつくる技術は当時なかったと推測されていたためという程度にとどまっていました。しかし、私自身疑問の残る解釈でしたので、先生の解釈の方が納得できます。

（ルーシュ教授）さらにいうとですね、グンデストルップの大釜は青銅ではないのです。鉄の板が利用されています。要するに青銅が発明される以前の大釜となるということです。そして、半球になるように、わざわざ鉄

の板をくっ付けて、板ごとに絵などを彫っています。しかも、板ごとの絵の場面は神話や象徴的な場面などで、神々について語るものといえます。

（質問）大変に恐縮ですが、個人的な感想を言わせていただければと思います。ちょっと関係ない話になるかもしれませんが、先生の話を聞きながら思ったのは、こうした古代社会の制度などは、意外と人命の消耗を限定にしていたというか、いわゆる身代わりの慣習より人々が殺されなかったように見えました。特に魔女狩りの時代に流行した贖罪のやぎによる身代わりの慣習がいい事例です。共同体を問わず、魔女でなくても、ある種、認定できない「グループ」は悪玉にされて、秩序崩壊の責任を負わせられて、虐殺されることになります。しかしながら、古代社会では、先生の話を聞いた限りでは、王族内で暴力が防がれたように聞こえました。間違っていたらすみません。もちろん感想に過ぎず、私の理解は少し誤っているかもしれません。

（ルーシュ教授）どちらかというと、生贄となった人数だけを見ても、また、第一次史料の記録をみても、やはり常に大がかりな虐殺になっていただろうと思われます。宇宙を復興するために大量の血を流すということは基本だったわけです。いいかえると、血を流せば流すほど、次の安泰と繁栄につながるのです。ですから、正直いってこうした社会制度下において、殺される人の数が比較的少なく済んだということは全くないと思います。

（質問）大釜の話に戻りますが、大釜の他に焼くための方法もあるわけですね。例えば火をつけて燃やすとか。この意味で、大釜は女性の子宮を象徴しているのではないでしょうか？

（ルーシュ教授）象徴性でいうと、あり得る解釈ですね。それよりも一番印象に残ることは、当時の人々の間でも、男性よりも女性の方が遥かに暴

力を生み出せる存在だという認識があったということです。アルジェリア戦争の経験のある人はすぐわかると思いますが、カスバ（アルジェのイスラム教の町）の屋上にいた女性たちの「ユーユー」という叫びは、強い憤怒の感情を引き起こし、それによって暴力の噴出が抑えられなくなるものでした。経験した人には一生忘れられない恐怖です。本当に。

（質問）ヴィクス（Vix）大釜は現地産ではなかったのですね。

（ルーシュ教授）その通り、ギリシャ産です。

（質問）つまり、他所から注文されて購入したものということになるのでしょうか。

（ルーシュ教授）はい、その通りです。

（質問）ということは、ギリシャでこういった大釜をよく作っていたということですか。

（ルーシュ教授）多くの部族でそうした大釜の購入が行われたと思われます。なぜなら、セルビアで発掘された大釜がヴィクス（Vix）大釜と非常に近いものです。ソーヌ川、ダニューブ川、ライン川以北の部族は大釜を発注して、その代わりに南部の文明国は珍しい品を受け取りました。例えば、ゲルマン人の女性の髪の毛から編まれた畳や、ゲルマン人にしか鋳造されなかった剣などが、大釜の対価としてあげられます。要するに、おっしゃる通りで、文明国からの輸入品でした。

（質問）大釜から時代は飛びますが、シャルルマーニュについてです。先生はシャルルマーニュが新しい諸王が生まれないように自分の娘たちを監

禁したとおっしゃったのですね。しかしながら、そういうことになると、いわゆるサリカ法についての通説と矛盾することになりますよね。そうなると、女性が王位を継げる存在であると認識されなくなったのはいつごろでしょうか。

（ルーシュ教授）サリカ法ですね。まず、1314-1317年に、歴史的事実の誤解がなされたわけです。カペー王朝の直系の王位継承問題が生じた時ですね。そのとき、直系は途絶えますが、諸侯の納得する継承者がどうしても見当たらないということで、女性が王位を継承できないといった証拠の史料が捜されたわけです。その結果サリカ法に当たったのです。サリカ法は360年、成文化されたフランク族の法律です。そして、確かに、ある条文において、「サリア領」を女性に継がせることを厳禁しています。しかしながら、問題は「サリア領」とは何なのかということです。そして、1314-1317年の法律家にとって、それが何であるか全く見当がつかなかったのです。（そのために、いわゆる通説的なサリカ法の長い伝統がうまれました。しかし誤解です。）なぜならサリア領というのはローマ国家からフランク族出身の新しい兵士に譲渡された領地です。つまり、サリア領とは、ローマ兵の給料を確保するために譲渡された土地でした。つまり、サリカ法が禁じたのは、「ローマ軍の兵士の給料を勝手に女性に財産として相続してはいけない」ということです。なぜなら、もしも女性の方に相続してしまうと、これらサリア領の利益が兵士たちに宛てられなくなるからです。しかし、14世紀になると、サリア領は忘れ去られてしまい、その痕跡もどこにも残っていなかったので、1314年頃に誤った解釈がなされるようになったわけです。

（質問）つまり、本来ならば英国の国王はフランス国王になる可能性があったということですか。

（ルーシュ教授）もちろんそうです。（笑）。イギリスはまだあきらめていないか。

（質問）さきほどの質問と関連して、中世からは離れますが、現代になってからの大がかりなジェノサイドは、おっしゃったような暴力を社会原則とする古代社会の何らかの遺制であるといえるのでしょうか。

（ルーシュ教授）一つ言えますのは、またかなり不思議に思ったことですが、ルネ・ジラールはミメティック危機において女性の役割について一言も触れていないことです。私が長く研究してきた結果、古代の社会制度において、女性の役割は大きく、中心的な位置にあったことは事実です。こんなことをいうと、フェミニストたちは怒りますが、事実は事実なので、仕方がないのです。その証拠は数えきれないほどあり、古代の未開な社会においては、母系社会になることが殆どであり、女性の役割は宗教上でも中心的な位置にあったことは明らかです。後世になってはじめて、それが父系社会へ変遷していきます。

さて、ジェノサイドや大量虐殺と言った出来事の原因として、古代社会の遺制が見いだされるとは言えないと思います。（時間の隔たりは長すぎるので）。

それよりも、私に言わせれば、こういったジェノサイドなどは、迫害やいじめの空気を作る文章が現れる時代で誕生すると思います。言いかえると、単に、贖罪の身代わりのヤギや生贄ということが、いまだに一般的に理解されていないから、人々はジェノサイドをみて驚くのだと思うのですが、驚くほどのことではないと思います。つまり、ジェノサイドは歴史上、相手を誹謗する「文章」、成文化の文化が行えるのみでしょう。それは本日の講演では、全く別の課題になるので一歩も踏みこまなかったのですが、制度化した暴力体制がキリスト教化していくという事柄について見ていくと良いと思います。本日の講演は、あくまでも異教の暴力体制を中心に紹

介しただけです。異教体制からのキリスト教化についても、もしご興味があれば別の機会に譲りましょう。とはいえ、今回とは全く別の問題です。

（質問）生贄自体がなくなることと関連するのですか？

（ルーシュ教授）別の意味となります。成文化の時代になるということが重要な要素となります。この意味で、文章の時代になり、「文化」の時代になるということで、文章上に「正当化」する必要がでており、死に関しても「正式」な理由がつけられるようになるわけです。そして、文章上に現れるこういった正式な理由が、大体、本質的な理由を隠すのです。

（質問）大釜の機能と象徴的な意味に関して戻ります。セルビアで発掘された大釜の話もされていましたが、コーカサス山脈での調査報告書を見る限り、文字通りに理解していくと、神判であるということになるかと思います。

（ルーシュ教授）まったくその通りです。本来ならば神判などについても触れたかったのですが、時間の都合上割愛せざるを得ませんでした。また、義務化された仇討ち（フェード）にも触れたかったです。本日の講演の延長線上に位置づけられますので。

（質問）ジュミエージュ（Jumièges）の二人[4]の苛立った者に関しては、先生の今日の話にあてはまるのでしょうか。

（ルーシュ教授）ちょっと難しいです。その件には詳しく調べていないので何とも言えません。なので、わからないと言わざるを得ません。なぜなら、私にとってまだ明らかになっていないのは、「ジュミエージュ（Jumièges）の二人の苛立った者」の話の正確性がどれぐらいあったかと

いうことです。そのため、結論を出すためには個別の検討が必要です。とはいえ、確かに今日の課題と関係していて、よい質問だと思います。

（質問）アイルランドに関する質問ですが、アイルランドにいった時、ある岩に足の跡があって、「王の足」と言い伝えられていました。そして、王は即位すると、新しい王はその足の跡を踏むとのことでした。こういった話は、今回の先生の話とどう結びつけうるのでしょうか。

（ルーシュ教授）私に言わせれば、その話を今日の話と結びつけない方がよいと思います。なぜなら、先ほどおっしゃった解釈は後世の解釈だと思われます。つまり、足跡が発見されて、この足跡は「逃亡中の王の足跡である」と勝手に決めつけられて伝承となったと思われます。つまり、後世での理由づけというか、解釈です。ですから、古代社会の原理原則と結び付けることは難しいかと思われます。歴史上では関係ないことだと思われますので、伝承の確認程度に留めた方がよいと思われます。

（質問）兄弟を殺したら早く片付くにもかかわらず、兄弟を殺してはいけないことになったとき、古代社会体制から脱出し得たと見てもよいのでしょうか？

（ルーシュ教授）はい、その段階で脱出は始まったと言えます。それについても話はあるのですが、それに入ってしまうと時間が過ぎてしまうので、またの機会にしましょう。

（会長）またの機会にでもご講演頂ければと思います。先生が紹介したように、それらの問題について垣間見えることが多く、残る疑問も少なくないので、次の講演に期待しつつ、ルーシュ先生に感謝の意を表したいと思います。

注

1　ミメティック危機とはジラール氏が確立した概念である。「無意識の模倣」という心理上の働きから生じる社会上の暴力発生を指す。またこの暴力の爆発から社会全体の保全を確保するための「身代わりのヤギ」という現象につながる。「身代わりのヤギ」と「ミメティック危機」は儀礼化されて、古代社会の宗教と密につながることにより、暴力の過剰発動がある程度に抑え、社会自体は存続するというような現象を指すといえよう。

2　Fustel de Coulanges, *La Monarchie Franque*, Hachette, Paris, 1888.
Histoire des institutions politiques de l'ancienne France. La Monarchie franque / par Fustel de Coulanges,... | Gallica（bnf.fr）

3　泥炭地のミイラは湿地遺体である。湿地遺体は泥炭地の中で自然にミイラ化（屍蝋化）した人間の死体である。

4　メロヴィング朝、クロヴィス二世の二人の王子に関する伝承である。12世紀あたりに初めて確認された伝承であり、クロヴィス二世が聖地への旅に出ていた間、長男に統治を任せて、王妃バチィルダ（Bathilde）の摂政の下に王国を置いた。しかしながら、不在の間、長男が一人の弟と手を組んで、王妃に反乱を起こした。クロヴィス二世が帰国すると、二人の王子を罰することに決定した。最初、死刑に処せようとしたが、王妃の抵抗があり、足の神経を焼くことに留めた。不自由となった二人の王子は出家する意識を表す。どこの修道院に出家させたらよいか決められなかった王妃が二人の王子をいかだにのせてセーヌ川に流すことによって神の決定に任せた。ジュミエージュで聖フィベルト（Philibert）が二人の王子を拾い、そこで修道士となった。その後、王と王妃がこれを聞くと、修道院を訪れて、院長への感謝を表すため、土地を修道院に寄付した。